

# ベケット、夜のねぐら

堀 田 敏 幸

## 一、夜のねぐら

ベケットの『ゴドーを待ちながら』はその中心人物がついに現れないことで、この戯曲に謎をもたらしている。ゴドーとは本当に人間であるのか、救世主キリストであるのか、それとも人間には絶対にその姿を見せない神であるのか。そして、この人物はウラジミールとエストラゴンの二人の浮浪者に、救いをもたらすことが出来るのか。今日、この人物は来なかった。しかし、明日には必ずや来訪する。そう信じる以上、明日の約束を二人の方から放棄することは許されない。ゴドーが二人に救済の道を開くはずの人物であるなら、それを自分たちから裏切るとすれば、反対に罰を受けることになるかもしれない。一体、ゴドーは二人の前に<sup>しゅつらい</sup>出来するのか。その者はどういう人物なのか。待つことに救済への、そして真実への望みが確かに宿っているのか。

ゴドーの来訪、これが第一の謎とするなら、もう一つの隠された秘密が存在する。それはウラジミールとエストラゴンが同じ浮浪者でありながら、夜のねぐらを別々の場所で取り、しかもエストラゴンはそれを相手に秘密にしようとしている点である。なぜ彼は自分の昨晚泊まった場所を明言できないのか。そもそも、なぜ二人は宿無しの放浪の身でありながら、昼間には一緒に行動を共にしたにも係わらず、夜には別れて過ごそうとするのか。劇が開始されてすぐ、二人がその日再会する。また会えたことを喜び合うのもつかの間、ウラジミールはエストラゴンに「昨夜、寝泊まりした場所を尋ねる。エストラゴンは「堀の中だ<sup>1)</sup>」と答えるが、その場所を明確にすることには拒否を示す。そして、翌日も同様に二人が出会って、ウラジミールが寝場所を尋ねると、エストラゴンは「聞かないでくれ<sup>2)</sup>」と返事を拒む。なぜエストラ

ラゴンは、相棒であるはずのウラジミールと夜のねぐらを一緒にしないのか。

ウラジミールとエストラゴンが、今日初めて出会った仲ではないことは確かである。彼らは始終行動を共にするようになってから、すでに「五十年」余りになることを語り合っている。その間には、エストラゴンが川への投身自殺を図ったことが二人の話題にのぼる。そのような二人連れと呼んでも良いような親密な仲間であるにも係わらず、彼らは夜のねぐらを別にすることを選ぶ。独り身であれば、浮浪者であればなおのこと、昼だけといわず夜も共同生活をしていた方が、お互いに生活が便利になることは確かであろう。食事の準備をするにも一緒にした方が時間が掛からないはずなのに、それも行わない。もっともどのような食事を取っているかは作中で語られるわけではなく、エストラゴンが空腹感を覚えると、ウラジミールは持ち合わせのニンジンとカブを提供する程度の粗食である。また裕福なポゾーが食べた鶏の骨を地面に捨てたのを見たエストラゴンは、それをもらおうと必死になる。彼らはこのように劇中で語られる限りにおいては、自分で調理した料理を摂取しているようには見受けられない。だから、この二人がことさら食事に関して、共同生活をするには及ばないとも考えられる。

食事の用意をするために、夜まで行動を共にする必要はない。それでは、夜の寝場所はどうか。ウラジミールとエストラゴンは共に浮浪者ながら、夜の宿に関しては二人の好みは相違している。どちらも自分の住居を所有しないことは当然だが、一方は屋根なしの露天で眠るような遣り方では体質に合わない。今日のところはゴドーがやって来ないことを使いの少年から聞かされた二人は、明日まで夜をどうやって過ごすか考えたとき、二人の意見は食い違う。

ウラジミール：あの子は、ゴドーが明日はきっと来るって言っていた。(間) どう思う？

エストラゴン：じゃあ、ここで待つしかない。

ウラジミール：馬鹿なこと言っちゃいけない。夜露をしのがなくちゃ。<sup>3)</sup>

ウラジミールは何の建物もない野原で眠ることを嫌っている。一方、エストラゴンの方は夜露に濡れるような路上の宿泊にも耐えられる。ウラジミールがゴドーの出現を期待する理由の一つとして、彼がやって来たなら、自分たちを彼の家に招待してくれて、食事も満腹になるほど食べ、そして暖かい藁わらの上で寝られることがある。ウラジミールは精神的な救済をゴドーに求める以上に、まず生活上の援助を求めている。別の箇所ではゴドーからの伝言を言い付かってきた少年に向かって、彼は少年がゴドーの家のどこで寝るのか尋ねる。少年が案の定「物置」と答えると、続けて「藁わらの中で？」<sup>4)</sup>と念を押す。ウラジミールは屋根のある暖かい場所で、夜の宿を取ることを切望している。

エストラゴンは夜を過ごすのに、夜露に濡れることもいとわない。しかし、もし屋根のある建物の下で夜の睡眠を取ることが可能であるとすれば、彼にこれを拒む理由はないであろう。しかしながら、エストラゴンが一人になって夜を過ごす場所は、彼がウラジミールに告げたように「堀の中」なのである。彼はその日の夜のねぐらを決めるのに、まず最初の条件として風雨をしのげる場所を求めないのであろうか。どうも彼はそのような条件を考慮しないでも、十分にやってゆけるだけの精神力と体力を保持しているらしい。それ以上にエストラゴンにとっては、屋根の下に眠るよりも「堀の中」に睡眠を取る方が、彼の生き方に相応しいと考えているようにも受け取れる。

ウラジミールとエストラゴンは二人とも浮浪者の生活をしている。なぜそのような境遇に陥らなければならなかったのか、作者のベケットは説明を与えようとはしない。不遇となった理由を故意に隠蔽するのは、ベケットの他の作品についても少なからず該当する。ワットはなぜこの二人と同様、浮浪者なのか。そして、ノット氏とは一体どういう理由で隠者の生活を送っているのか。モロイもマロウンも、なぜ松葉杖に頼らないと歩けないほど足が弱っているのか。こうした主人公の陥った不遇の説明を、ベケットは語ろうとしない。彼は逆境の中に置かれた人間の本质を、抽象化して捉えようとしている。『ゴドーを待ちながら』においても、ウラジミールとエストラゴンが浮浪者の生活をしている理由は問わないとしても、五十年も前から仲間として生活している二人の人物が、昼間は偶然にもどこかで出会い、そして夜には別々のねぐらを選ぶ。そのねぐらが屋根付きの場所がいいのか、露天の野原がいいのかという好みはあるにしろ、昼間は仲間として、夜は個別に生きるというのは、一般的に言って不可解の念を与えるであろう。

浮浪者であるということは、ベケットにおいて仲間を作らないことであるのか。登場人物が浮浪者になった理由を作者が秘密にするのは、その人物がそれまでの境遇から解放された自由な存在として生きる為であるのか。過去の条件を問題にすれば、人はその条件を克服すべく行動を起こすであろう。今陥っている逆境から如何にして脱出できるのか、その手段について思考を巡らすであろう。そうであれば、その人物は不遇の原因となった人間関係や経済状況、社会的条件や道徳的規範について批判の矢を向けることになる。しかし、ベケットはそうした現実の条件を部分的に捨象して、人間の根本的な問題を問い直そうとする。そして、その問いに対し作者が全面的に解答を与えてしまうのではなく、その答えは小説の読者や劇の観衆が自ら導き出すことを期待する。これがベケットの方法なのである。

ベケットは二人の人物が昼間は仲間として、夜は個別に過ごすことに謎解きを強要している訳ではない。二人が別々に過ごすことに関して、彼は劇中で何度も同じような反省を言わせている。

エストラゴン：お互い別々に、自分一人でいた方がよかったんじゃないかと思うんだ。

(間) 同じ道のりを進むようには出来てなかったんだ。

ウラジミール：(怒らず) どうかな、そうとも言えない。

エストラゴン：そうじゃないといえば、何だって分からない。

ウラジミール：その方がいいと思うんなら、いつだって別れられるってことだ。

エストラゴン：今じゃ、もう無理というものだろう。<sup>5)</sup>

この部分だけを読めば、二人は夜だけを別々に過ごそうとしているようには理解できない。彼らはすでに五十年來の仲間として人生を送ってきた。一日中、そして毎日が毎日、常に行動を共にした訳ではないことは、劇の始まりのところで再会できたのを喜んでいるところからしても察せられる。彼らは家族のように共同生活を目的としているのではなく、ある場所に二人が放浪の末にやって来ると、そこで互いのテレパシーが働いて、うまく落ち合うことが出来たということであろう。そうであれば、二人は別々の放浪生活を送っていると見なすことも可能であるにも係わらず、気持ちの上では、この二人はいつも一緒に励まし合って行動していると感じとっている。

ウラジミールとエストラゴンは仲間であり友人ではあるが、またホームレスの浮浪者でもあるのだから、自分たちの自由や気楽さを重んじて、付かず離れずの関係を維持しているのだろう。二人はこの距離をよく理解している。

ウラジミール：気分というものは思い通りにいかないよ。一日中、すばらしい気分ではなかったんだ。(間) 夜中には、一度も起きなかったからね。

エストラゴン：(悲しげに) そうだろう。俺がいない方が、お前は便通がいいんだ。

ウラジミール：お前がいないと寂しかった——それでいてよかった。奇妙だろう？

エストラゴン：(気を悪くして) よかった？

ウラジミール：(よく考えて) そう言うてはいけないのかも。<sup>6)</sup>

この会話で、エストラゴンが「俺がいない方が、お前は便通がいいんだ」と言っているところを見ると、二人は夜のねぐらを共にすることもできると理解できる。だから、常に夜は別々ということではなく、その時々状況次第ということになる。そうすると、この二人が常に二人一緒に居ることはない訳だから、何もことさら「お互い別々に、自分一人でいた方がよかったんじゃないか」と言うほど、二人は互いに拘束しあっているとは思えない。しかし、二人の心理上では互いに束縛しあっているように感じているのであろう。ウラジミールは言う、「お前

がないと寂しかった——それでいてよかった。奇妙だろう？」寂しいというのは理解できる。では、なぜ同時に「それでいてよかった」という反対の気持ちを表明するのであろうか。これについて、二人は解答を見出していない。

二人は一緒に居ることが多い。だから、別れた方がいいと思っている。ところが、別れて過ごすとなると寂しくなる。しかし、普段別れたいと思っているのだから、別れて過ごせたことに「よかった」と思う。こういう論理が一般的に成立するところであろうが、もう少し深く考察してみるなら、別れていた方が好ましい理由がある。それは、二人は一緒に居ると退屈を紛らす為に、取り留めのない話について興じてしまうという性向を持っていることに起因している。話の内容が日常的な些事についてなら、二人はおかしく笑って会話を楽しめる。ところが二人は浮浪者であって、どうしてこのような状況になったのか理由が説明されないとはいえ、この生活方法は二人に不安を与える。家庭を持ち、住居を持ち、食事に事欠かないのが人間の一般的な願望である。ところが二人はそれを拒否して、ホームレスの生活に甘んじている。彼らがこの生活方法を好み、自ら選択したものであるとはいえ、そもそも彼らはこの世に生まれついたこと自体に疑念を抱いている。そして、エストラゴンには自殺を凶った経験を持つ。なぜ彼らはこの現世で生存していなければならないのか、絶えずこの疑問へと立ち返る。そして、この生存の価値を未知のゴドーに見出そうとして、虚しい待機の中に置かれる。彼らはこの待機の空虚を取り除くために、時間を二人の会話で満たそうとする。

エストラゴン：待っている間、興奮しないでしゃべることにして。俺たちは黙ることが出来ないんだからな。

ウラジミール：本当だ、きりが無いな。

エストラゴン：それというのも考えないためだ。<sup>7)</sup>

ここで二人が行っている会話は、物事を深く「考えないためだ」となる。考えるという行為を馬鹿げた会話で追い払えと、彼らは信じている。ところが、しばらく後では正反対への結論へと導かれる。

ウラジミール：もう考える危険はない。

エストラゴン：それなら、何も不平を言うことはないだろう？

ウラジミール：考えるというのは、最悪の事態というわけじゃない。

エストラゴン：そりゃ、そうだ、その通りだ。だが、事はそうになってしまう。<sup>8)</sup>

退屈を紛らすために行った些細な会話が、何かの切っ掛けで思いもよらぬ深刻なことへと飛躍することがある。喜ばしいことへ向かえばよいが、「最悪の事態」へと直行する場合の方が多いた方が普通であろう。過去のよい記憶はすぐ忘れてしまうのに対し、悪い記憶はいつまでも脳のどこかに潜んでいる。ちょっとした言葉のあやからこの悪い記憶が呼び戻されて、人の思考は最悪の状況へと落ち込んでいく。なぜこの不安な状態でなおも生きているのか。そもそもこの世に生まれついたこと自体が悪かったのじゃないか。人は自分の責任でないことにまで、生存理由を悪化させていく。だから、ウラジミールが「お前がいなくて寂しかった——それでいてよかった」という気持ちに至ったのは、一人であれば他人と会話をすることもなく、従って悪い状況に思いを巡らすこともなく、静穏な生活を持てると思ったのであろう。たとえ一人であっても最悪の事態を考えることは大いにあり得るが、二人の時ほどには不幸の思いに対し、刺激を与えることは少ない。

二人でいつも一緒に居る方がいいのか、それとも別れて一人の生活がいいのか。二人でいた方が人生の不幸に対して耐えていけると考えられる場合もあれば、不幸の実情によっては、一人でいた方が気が楽だと思える場合もある。人の性格や境遇によっても、この判断は分かれる。ウラジミールとエストラゴンとは昼間の行動は共にし、夜の休息は別々の場所で取るという中間の生き方を採用している。しかも、完全に昼は共同生活、夜は一人の生活と分離している訳ではなく、昼間出会うのも偶然に任せたとこがあるし、夜のねぐらも同じ場所を取る場合もあるというように融通をきかしている。これなら、二人が行動を共にするかどうかは二人の意志に依存していて、一見理想的であるように見える。しかし、状況によってはこの意志決定が自由になされない場合が起きる。ゴドーを待つという待機の状況に置かれた二人にとって、二人の目的が同一であるのだから、その行動も同一でなければならないという緊張関係の中に、彼らは今や拘束されているのである。

## 二、夜の悪

エストラゴンは夜のねぐらを「堀の中」に取ると言う。彼がそうするのは、単に夜露に濡れても平気だというだけの理由とは考えられない。なぜなら、もしその時に居る場所が回りに建物の全くない原野というのなら、それもやむを得ぬと納得がいくが、もし風雨のしのげる場所があるなら、そこに寝泊まりした方が体が休まるというものであろう。相棒のウラジミールは屋根のある所に宿を取っているのであろうから、エストラゴンも望めばそう出来るであろう。ところが、彼は何の覆いもない「堀の中」で寝ると言う。なぜ彼はそのような野生の生活を好むのか。単に彼がそのような原野の生活に、魅力を感じているというだけに留まらないだろ

う。

二人が一日目に出会って、ウラジミールがエストラゴンに昨晚の宿泊場所を尋ねたとき、エストラゴンは「堀の中だ」と返答した。そして、その場所がどこにあるのか更に問われると、彼は「あっちの方さ」と曖昧にしか答えない。ウラジミールは問いを続ける。

ウラジミール：それで、殴られなかったかい？

エストラゴン：殴られたさ……でも、それほどでもない。

ウラジミール：またしても同じ奴らだな？

エストラゴン：同じ奴ら？ どうか。<sup>9)</sup>

エストラゴンは堀で泊まったとき、見知らぬ男たちから「殴られた」。しかも、これが最初の暴力ではなく、すでに何回か続いていて、相棒のウラジミールはそれを知っている。なぜエストラゴンは堀の中で寝泊まりをするのに、殴られなければならないのか。しかも、すでに暴行を受けたにも係わらず、なぜまた同じような野宿をするのか。普通の人間であるなら、たとえ浮浪者とはいえ、一度暴力を受けたのなら、そこを避けようとするであろう。浮浪者のエストラゴンにとって、他の寝場所がまったく存在しない訳ではなかろう。なぜなら、仲間がいて、その者は暴力を受けない他の安全な場所に寝泊まりしている訳だから。どうしてエストラゴンは相棒に助けを求めて、一緒に所に泊まらないのか。仲間の援助を請うて、迷惑をかけるのを好まない性格であるのか。それなら、ウラジミールの方からエストラゴンの暴行被害に対し、救助を申し出た時はどうか。二日目になって、二人はまたゴドーを待つべく落ち合う。ウラジミールは昨日と同じくエストラゴンに、夜殴られたかどうか尋ねる。エストラゴンは沈黙を守って、「聞かないでくれ」と返答するのみである。そして会話は進み、次のような話となる。

ウラジミール：お前は自分を守ることが出来ないんだ。俺がいたら、お前を殴らせるようなことはさせなかった。

エストラゴン：それは出来なかつただろうな。

ウラジミール：なぜだい？

エストラゴン：あいつらは十人だったからね。

ウラジミール：そういうことじゃない。お前に、殴られるようなことをさせなかつたと言っているんだ。

エストラゴン：俺は何もしやしなかつた。

ウラジミール：それじゃ、なぜ奴らは殴ったんだい？

エストラゴン：分からない。<sup>10)</sup>

エストラゴンは十人もの連中から殴られたと言う。よく窮地にあって悪い連中が正確に十人と数えられたものだと不思議にも思えるが、恐らく彼はウラジミールの追求に対し、言葉任せに数字を言ったのであろう。それにしても老人の浮浪者に対し、十人近い悪者が寄ってたかって殴りつけるというのも、真実味がないように思える。もしこれほどの悪者に暴行を受けたなら、エストラゴンはもっと重傷を負っていたのではないかと推測されるからである。とにかく、エストラゴンが他人から暴力を受けたというのは確かなのであろう。そこで、相棒のウラジミールはこの連中からエストラゴンを守ろうというわけだが、彼が意味するところは相手の暴力を力で封じるということではなく、仲間のエストラゴンに、相手を怒らすようなことは制止できたであろうと助言する。しかし、エストラゴンは「何もしやしなかった」と応じる。

なぜ、先に何も悪いことをしていないエストラゴンが殴られるのか。これが一回限りのことで、何かの偶発的なことから暴力が始まるというのは考えられることである。ところがエストラゴンの場合、今回だけのことでなく、昨晚も殴られているのである。続けて二日も理由もなく殴られる。一体なぜと、仲間でなくても思うであろう。堀の中に無断で寝泊まりすることが、何か違法行為だったのだろうか。その地区は暴徒の溜まり場で、エストラゴンはそれを知らずに彼らの聖域を荒らしたのだろうか。それは本人も言うように「分からない」ことだ。

堀の中で寝ようとする、誰か悪者によって暴力を加えられる。その悪者は一人だけでなく大勢だ。自分の方から、相手を怒らすような悪いことは何もしていない。これだけの流れを読めば、エストラゴンは暴徒に襲われた夢でも見ているのではないかと推測が働く。彼はウラジミールに、昨晚見た夢を語っているだけなのだろうか。その夢は二晩続けて見るような、エストラゴンの潜在意識の中に刷り込まれてしまったような、強迫観念なのだろうか。強迫観念であれば、彼がその理由となった直接的な出来事を見出すことは難しい。なぜなら、その原因となるものは、すでに過去のものとして忘れ去られてしまっているはずの出来事だからである。忘却の中に沈められてしまった事件は、本人の意志的な思考の中では決して表面に表れることはなく、ただ夢の中で密かに浮上してくるものであるだろう。たとえ思考によって思いついたとしても、それは即座に否定されてしまい、それが真の原因として認識されることはない。

『ゴドーを待ちながら』の中で理由もなく暴力を受けるという場面は、このエストラゴンの事件の他にももう一つある。それはゴドーが今晩は二人のところへやって来れないことを、伝言に来る少年の兄の場合である。ウラジミールはゴドーの来ないことを聞くと、少年に仕事は何をしているのか尋ねたあと、更に質問を続ける。

ウラジミール：ゴドーさんは君に優しいかい？

男の子      ：ええ。

ウラジミール：殴らないかい？

男の子      ：いいえ、僕は。

ウラジミール：じゃ、誰を殴るんだね？

男の子      ：僕の兄さんです。<sup>11)</sup>

ゴドーは使いの少年を殴ることはしないが、その兄を殴る。なぜ兄の方だけ暴力を受けるのだろうか。ウラジミールは少年自身が殴られない理由を次に尋ねるが、少年の返事は「分かりません」という言葉に収まる。ここで如何に質問好きなウラジミールといえども、兄の方が殴られるのはなぜかという質問を発することは躊躇する。兄がゴドーから暴力を受けるのはなぜか、作者のベケットはこの理由を告げることを意識的に拒んでいると考えられる。ゴドーがどういう人物なのかを知りたくて、ウラジミールが彼のもとで働いている少年に状況を尋ねるのは自然なことであろう。そして、この少年に兄がいることを、劇の観衆に知らせることも必要であろう。なぜなら、二日目の夕方、ゴドーがまたも来れないことを告げに来るのは、一日目の少年とは別の人物だという設定になるからである。だから、少年に対しゴドーが優しいか聞いたついでに、作者がその兄の存在を表明しておくのは当然と考えられる。しかし、使いの少年にはゴドーが優しく、その兄には暴力をふるうという設定は、その暴力の理由が明確でない以上、この暴力は劇内の別の状況に暗示をもたらしていると理解した方が適当であろう。そうでなければ、少年の兄に対しゴドーが暴力を加えるという人間関係の設定が、劇中で何の意味もなさないことになる。

理由の隠蔽された一つの暴力は、もう一つの隠された暴力と連係している。それは少年の兄がゴドーによって殴られるということと、エストラゴンが夜、堀の中で寝泊まりしようとする時、見知らぬ男たちから暴力を受けるという二つの暴力である。なぜこの二つの暴力は理由が示されないのだろうか。ウラジミールがエストラゴンに、自分がその場にいたなら、エストラゴンが殴られるようなことはさせなかったと言ったように、原因はエストラゴン自身にあるのだろうか。それとも、エストラゴンが殴られるような悪いことは何もしていないと言うように、原因は見知らぬ悪者にあるのだろうか。どちらが直接的な原因であるにしろ、エストラゴンが暴徒に殴られたことに関して、他にも不可解な点がある。まず一つとして、もしエストラゴンが暴行を実際に受けたとすれば、彼の顔や体には暴力による傷跡が残っているであろう。十人もの悪者から殴られたとすれば、多少の血は流れたであろうし、打撲傷によるあざや痛みが残るであろう。ところが、エストラゴンは翌日ウラジミールと会ったとき、何の痛みを訴え

ることもなければ、服装に関しても破れたり汚れたりした形跡がない。ウラジミールもこれに気づく気配さえないのである。一体暴力とはいっても、どの程度のものであったのか。そして、本当に暴力が行われたのか。

もう一つの不可解な点は、エストラゴンが悪者に殴られたことを、相棒のウラジミールに積極的に話そうとしないことである。エストラゴンはこの暴力事件だけでなく、夜に寝泊まりした場所をも相手に告げるのを躊躇している。なぜ彼は暴徒たちの悪事をもっと積極的に訴えようとししないのか。エストラゴンは浮浪者であって、社会的に強い立場にある人間ではない。しかも彼は老人であって、社会の悪事を他人に訴えるだけの気力ももはや喪失し、自分の殴られるのはどうしようもないという諦めの境地に入り込んでいるのか。そういう気持ちも多少はあるだろう。しかし、すでに彼が他人から暴力をふるわれていることがウラジミールにも知れているならば、これ以上に隠したところで何の得策もない。しかも夜、暴力を受けることがあらかじめ察知できるというのに、なぜ彼は相棒と別れて、一人で堀の中に夜のねぐらを持つとするのか。まるで自ら望んで暴力を受けに行くようなものではないのか。

エストラゴンが暴行を受けることには理由がない。しかも、彼はこれを相棒に隠そうとしている。使いの少年の兄はゴドーから殴られるが、その理由を少年は知らない。二つの暴力事件が理由もなく、一つの劇作品の中で表明されている。この二つは一体関連性があるのか、ないのか。少年の兄が殴られる話は、詳細な筋道があるわけではない。少年とウラジミールの会話の流れから、こぼれ出た話に過ぎない。いわば言われなくてもよい会話であるが、作者のペケットはそれを敢えて書いている。そうであれば、この意味のあまりない挿話を別のよく似た話と関連づけてみるのも、興味をそそるであろう。少年の兄はゴドーによって殴られる。ゴドーはエストラゴンとウラジミールにとって見知らぬ人物である。エストラゴンは夜、見知らぬ男たちによって殴られる。この見知らぬゴドーと男たちとは、同一人物ではないのかと推測が働く。

エストラゴンが夜男たちから殴られるのが事実であるかどうかは、怪しいところである。単に彼が被害妄想にあっているだけではないのか。過去においては暴力を加えられたことがあったのかもしれない。しかし、今回も実際に暴力が行われたと判断することは、エストラゴンの挙動からして難しい。そうすると、彼が暴力を受けた男たちというのは、実はゴドーのことではないかと考えるのである。

エストラゴンが暴力を加えられる理由を知らないのは、実はその暴力が実際にはまだ起こっていないことだからである。彼はただ単に何かを恐れているのであって、その何かを彼は明確に気付いていない。しかし、明確には意識していないが、彼はそれを感じとっている。彼は過去において川への投身自殺を図った。なぜそのような命を絶つ行為をしたのか。エストラゴン

はウラジミールと、聖書の中で泥棒二人のうち一人だけが救われたという話をしたあと、ウラジミールが「悔い改めることにしたら、どうかな？」と言ったところ、エストラゴンは「生まれたことをか？<sup>12)</sup>」と応じている。エストラゴンは生存していること自体に対して、不安を抱いていると理解するしかないであろう。自分の誕生を悔いる人間であれば、彼が劇中で何度も自殺への誘惑に駆られるのも納得がいく。自殺願望に取り付かされている人間は、自分が生存していることを不安に思っている。彼が自殺を忘れていた時でも、無意識の中では生存の恐怖が支配している。彼が昼間の行動から解放されて夜の孤独な時間に入るとき、無意識の中に閉じ込められていた不安は夢となって姿を表す。彼が生存していることには価値がない。命を捨てることに無意識が始動するとき、彼は見知らぬ人物によって暴力による罰を受け、命を危険にさらすのである。エストラゴンが坂の上に見た人物をゴドーだと思ったとき、彼は「俺は呪われてるんだ！<sup>13)</sup>」ととっさに叫んで罰を恐れた。

救世主として待ち望んでいるはずのゴドーをなぜ恐れるのか。ゴドーは使いの少年の兄を殴ろうとした、処罰を科するところの神であるのか。神はどんな人間に対しても優しいわけではあるまい。悪徳に走り神に冒瀆をはく人間に対しては、その罪を暴くであろう。授けられた命を勝手に無用なものとしげすむ者に対しては、怒りを示すであろう。マーティン・エスリンは『不条理の演劇』の中で、「私たちと意志を通わせることのない神は、私たちに同情心を寄せることはできず、理由も告げずに私たちを罰するのである<sup>14)</sup>」と語った。神の恩寵を信じることの出来ない人間は心に不安を覚え、いずれ罰せられるのではないかと恐れる。しかし、見知らぬ人間によって暴力を加えられる者は、その暴力の発信者が神であることを容易には気付かない。エストラゴンはただ見知らぬ者の暴力を、夜一人になって堀の中で耐え忍ぶだけである。彼は仲間のエストラゴンと共に屋根のある所で身を守ることも出来るであろうのに、彼が選ぶのは一人の孤独な受難の道である。

### 三、別の所

見知らぬ人間から理由もなく暴力を加えられる。何か自分の方に落ち度があったのだろうかとか考える。そうかもしれない。なぜなら、公共の場所とはいえ、自分の所有地でない所に寝泊まりしたのだから。それとも相手がやくざな人間で、自分の威光を見せつける為に暴力をふるってみただけであるのか。そうかもしれない。世の中には自分の不遇から抜け出すのに、正当な手段を持ち合わせない人間もいるのだから。エストラゴンは堀で寝泊まりしようとして暴行を受けた。しかし、この暴行は本当に起こったことであるのか。多分、一度は起こったのであろう。しかし、同じように二日目の夜も暴行が行われるであろうか。悪者はその地域を縄張

りとして、闊歩しているのかもしれない。そうであれば、なぜエストラゴンはその場所を避けて、他の場所にねぐらを求めないのか。彼が敢えてその場所を選ぶのは、彼の潜在的な不安がそこへと彼を誘導するからであろう。不安はそれを避けようと意識するほど、その対象となるところへと本人を導く。トラウマとなった意識は不安を切り離そうとするほど、その現場へと本人を舞い戻らせる、ちょうど殺人や放火の現場へと犯人が舞い戻ろうとするように。

エストラゴンはゴドーを待つ二日目の夜も、前夜と同じ堀へと行く。そこでまたも見知らぬ男たちから殴られたと言うが、果たして本当に事件はあったのか。それとも、彼の無意識が引き起こす夢であったのか。彼の体に傷害の跡は何も残っていないし、彼はこの事件を仲間のウラジミールに隠そうとする。堀での暴行は、夢の出来事である可能性が高いであろう。実際、エストラゴンが夢を見る場面は他の所でも起こる。二日目に二人が出会って、昨日と同じ場所にいと、その場にあった一本の木が昨日は葉をまったく落とした姿であったのに、今日は葉で覆われている。不思議に思った二人は互いに意見を言い合うが、苛立ったエストラゴンは結論をこう出す。

エストラゴン：昨日の夕方は、俺たちここにいやしなかったって言ってるんだ。お前は悪い夢でも見たのさ。

ウラジミール：すると、夕べはどこにいたんだ、お前のつもりでは？

エストラゴン：知らない。別の所さ。どこか他の場所だよ。空き地はどこにでもあるからな。<sup>15)</sup>

ここで、ウラジミールは実際に夢を見たわけではない。エストラゴンが「悪い夢を見た」と言ったのは、相手の主張に根拠がないことをこう表現したまでである。しかし、昨日この場所に実際にいたにも係わらず、「いやしなかった」と間違った主張をしているのはエストラゴンの方であるのだから、夢を見たのが相応しいのはエストラゴンの方であるだろう。彼はウラジミールの追求に、またしても正しく返事することが出来ない。昨日ここに居たのでなければ、一体どこなのか。エストラゴンは「別の場所さ。どこか他の場所だよ」と答える。彼は昨日居たところを本当に忘れてしまったのだろうか。彼はこの後のウラジミールの誘導によって、昨日この場所に居たことを思い出していくが、なぜ前日のことまで忘れてしまうようなことが起こるのか。彼は健忘症を通りこして認知症の程度にまで、物忘れが進んでいるのであろうか。もし物忘れが激しく、何事も夢のせいにしてしまうとしても、ただし全く無関係のてならめを言っている訳ではなかろう。ここに居なかったという主張はエストラゴンの間違いである。ところが、「別の所」だという答えには、彼の行動範囲の中で幾分かの関連性を持っている。

「別の所」、つまりすでに見てきたように、エストラゴンが夜のねぐらを尋ねられて、堀のある場所を明確に答えようとしなかった。彼にとっては寝場所が堀であろうと、野原であろうと、木の下であろうと、とにかく一人になって放浪の身であることが重要なのである。だから、他人に自分の夜過ごした正確な場所を知られたくないというのが、彼の真意なのである。浮浪者として夜のねぐらが秘密であるなら、昼間に過ごした場所も、彼にとっては事実通りである必要性はないであろう。木が一本立っているだけの場所で夕方、仲間と過ごした。その目的はゴドーという人物を待つためである。しかしながら、その人物は現れなかった。この徒労と化した行為の場所を正しく認知したところで、どれだけの価値が生じるというのであろう。無価値な昨日の場所など、忘れてしまって困ることはない。彼が居たのは放浪者に似つかわしい不定の場所であり、「別の所」なのである。

昨日のことを忘れてしまうのはエストラゴンだけではない。召使いを連れた通行人のポゾーも同様のことを口にする。ただし、彼は忘れることに対していたって理性的である。昨日の事実と今日の忘却の間に、心の動揺は起こらない。

ポゾー：昨日は誰にも会わなかったと覚えとる。だが明日になれば、今日誰かに会ったことなど忘れてしまっているだろう。従って、あなた方に言うことで、わしを当てにしてもらわない方がいい。それに、そんなことはもう沢山だ。<sup>16)</sup>

忘却の中であって、ゴドーの話は実際に起こっていることなのであろうか。起こることといえば、ゴドーの出現を二人の浮浪者が待ち望むというだけで、後は二人の語ることで成立している。劇の場面にしても、一本立っている木は昨日は葉のない丸裸だったが、今日は葉も青々と生い茂っている。一日の経過でポゾーは盲人になり、ラッキーは唾者になる。使いの少年は昨日と今日で別人だ。一体これだけの様変わりに対して、観衆はリアリティを持てるのであろうか。劇という時間と場所の制約された虚構性が、この虚の枠組みを支えているのは確かだ。ポゾーが昨日会った人物を忘れ、エストラゴンが昨日居た場所を忘れてしまう。この真実性を保証しているのは、劇全体が虚の枠組みの中に構成されているということに因るのであろう。ウラジミールもエストラゴンも宿なしの浮浪者であり、一方は堀の中で眠る。食べるものといったら、カブやニンジン、それに他人が捨てた鶏の骨である。二人の全体が虚構の中に置かれ、その反転としての現実における真実が問われているのである。

昨日の夕方いた場所をエストラゴンが忘れてしまう、そして何をしたかも。彼は相棒のウラジミールに教えられてそのことを思い出すが、その場所で居眠りしたことも忘れてる。

ウラジミール：夕べ、お前が座っていたのも、そこだ。

エストラゴン：せめて、眠れたらなあ。

ウラジミール：夕べは眠ったぜ。

エストラゴン：やってみよう。<sup>17)</sup>

エストラゴンは夕方になって眠くなった。彼は恐らく暴漢によって殴られたために、よく眠れなかったのであろう。しかし、眠りに入ると夢を見たのか、「俺は倒れ落ちた<sup>18)</sup>」というめき声を上げて目を覚ます。どこか深い穴へでも落ちたのだろうか。地獄へ落ちた夢なのかもしれない。何しろ彼は昨晚、暴漢によって襲われたのだから、その原因は彼自身の不品行にあるのかもしれない。彼はその理由は分からないながら、罰せられる立場にある。それにしても、エストラゴンはちょっと居眠りしただけで、容易に夢を見るほど眠り込むとは、彼の悪夢の原因はよほど根深いのもかもしれない。これがベケットの他の主人公、特にモロイであるなら、夜に眠るよりも陽が昇ってから眠りにつくと言う。

私の習慣というのは、眠るときには朝になってから眠るというものだった。というのも、私は少しも困らないで、数日間まったく眠らないでいることが出来たからだ。なぜなら、私の徹夜の不眠は一種の眠りだったから。そして、私はいつも同じ場所で眠るのではなく、時には庭の中で眠ったのだった。<sup>19)</sup>

モロイとは年老いた母を探して旅をしてきた人物で、再会した時には、彼は松葉杖を使わなければならないほど足を悪くしている。しかも、自分の名前さえ忘れる程の健忘症に陥っている。そうした人物が旅の途中で過ごす生活の仕方は、一般人の方法とは大きく隔たっている。彼は「朝になってから眠る」と言う。しかも、一日の不眠であるなら、誰にでも起こることであろうが、彼の不眠は「数日間」続くこともあると言う。数日間も眠らなければ、頭脳も肉体も朦朧<sup>もうろう</sup>としてしまうところであろうが、モロイは「徹夜の不眠は一種の眠り」だと、不眠が苦痛ではない理由付けをする。数日間の不眠が睡眠に匹敵するとは、奇妙な理屈のようにしか思えないが、彼は夜に眠らないとしても、彼の言うように「朝になってから眠る」ことで、睡眠が確保されているのであろうか。それとも、彼は朝寝をしなくても、数日間の不眠に耐えられる強健な人物であるのか。そして、夜に眠らないとすれば、その長い時間を彼は何をして過ごすのか。床に横になって一応、目は閉じているのか。それとも起き上がって、椅子に座りこんでいるのか。そうではなくて、モロイは「昼間や夜の大部分を庭で過ごす<sup>20)</sup>」と言う。

夜を庭で過ごす。そこでは何か体を使って活動するのであろうか。思考や空想にひたるので

あろうか。それとも、ただぼんやりと放心しているだけなのか。夜の長い時間のうちには、時に眠くなることがあるだろう。モロイは不眠が苦痛になることはないのか。目を閉じた不眠の中では時に妄想に捕らわれ、時に悪夢に襲われることが生じるであろう。哲学者のジル・ドゥルーズは、「カフカとベケットはあまり似ているところがないとはいえ、二人には不眠症の夢という共通したものがある。不眠の夢においては不可能を実現することではなく、可能なことを消尽することが問題となる<sup>21)</sup>」と言う。「可能なことを消尽する」とは、あらゆる欲求や目的や意味を放棄することによって、状況の総体を組み合わせることであると彼は主張する。不眠において人は様々な状況を思い浮かべてはその映像を脳裏に映し出していくのであるが、果たしてドゥルーズが言うように、「可能なこと」の総体を得られるかどうかは疑問であろう。ただ不眠において、人は様々な事態を想起しては、また次の事態へと夢のイメージを展開させる。不眠の夢を見る人は多大な映像の中に投げ込まれて、終わりのない時間の重圧を生きることになる。ベケットのモロイの場合、不眠の夢に苦しめられることはあまりないが、見知らぬ人間を殺害するというような悪夢を、事実のように語ることが起こりうる。悪夢なのか事実なのか、その真偽は不眠の本人にも理解しかねることになる。

エストラゴンなら堀の中で一人になって就寝しようとするとき、見知らぬ人間から殴られると言う。それもあ一日限りのことではなく、また次の日も同様なことが起こる。これは一体事実なのか、それとも彼の悪夢なのか。事実であれば、そのような暴力の行われる場所に二度と近づかないのが、普通の人間であるだろう。エストラゴンが二日目もその暴力の場所をねぐらとして選ぶとすれば、その暴力を彼自身が受ける必要があると、無意識のうちに思っていることの表れであろう。彼がこの無意識の誘導から逃れることは難しい。エストラゴンは暴力の行われる場所を堀の中だと言う。なぜ堀なのか。恐らく他の場所、野原とか、川辺とか、大木の生えている下とかでも良いのであろうが、堀であれば、そこが回りの地面より低い位置にあるために、人目に付きにくいということがあろう。堀の隠れた場所であれば、彼の孤独は他よりも安全に守られるはずである。

エストラゴンは夜露に濡れることをいとわない。一方相棒のウラジミールは、風雨の避けられる屋根の下をねぐらに選ぶとする。夜を徹夜で過ごすというモロイなら、睡眠を取るときには、家の中よりも「庭」の方を好むと言う。なぜエストラゴンとモロイは、露天の方を優先するのであろうか。エストラゴンは転んだウラジミールを手を引いて起こそうとしたとき、反対に自分の方が転んでしまう。彼はそこで、「いい気持ちだ、地面は！<sup>22)</sup>」と言う。普通なら転んだのであるから、痛いとも言うところを、地面に体を落ち着かせる状態を好ましいものと判断する。彼は大地に対して愛着を抱いている。地面に転ぶことと堀をねぐらに選ぶことは共通している。大地は浮浪者の彼に安心感を与えるのであろう。モロイも不眠の夜を過ごす

のに、家の中よりも庭にいる方を好む。彼らにとって自然の中の放浪生活こそが、本来的な生き方と思えるのであろうか。

堀のような窪んだ所を好む人物にもう一人、ワットがいる。彼はノット氏という隠者のような生活をしている人物の家で、召使いとして住み込みの仕事をするようになった。そこでは使用人にさえ姿を見せようとしない主人の、無の体現者とも言えるような生活を体験する。そんな彼はある時、洞穴に身を置く姿を空想してこう言う。「あらゆる山の麓ふもとに、上る坂道、下る坂道の洞穴の奥深くに身を置く。そして自由に、ついに自由に、一瞬の間だけでも自由になり、ついには無となる<sup>23)</sup>」。洞穴に身を横たえることがまるで死の床に着くかのように、ワットは自分自身からも解放されて、自由の身、さらには無の存在へと化そうとする。大地に開けられた洞穴は、そこに身を置く者を現実生活から切り離された孤独の境地、そして人間世界の何ものからも拘束されない自由の世界へと、誘いざなうことが可能であるのか。ワットは人間の欲望から自分を解放しようとするとき、自然の中の住み処を選ぶのである。

ベケットの主人公は人家を避けて路上生活を優先する。これこそが浮浪者の生活に相応しいとも言えようが、エストラゴンの相棒のウラジミールは出来ることなら、屋根のある建物の中で睡眠を取ることを願っている。なぜエストラゴンの方は仲間と別れて、それも五十年來連れ立ってきた仲間と別れて、他の場所にねぐらを確認しようとするのか。それは単に、彼が夜露に耐えられるという条件だけではないだろう。エストラゴンは堀をねぐらと定めたとき、暴漢に襲われる。一日だけのことなら、不運として片付けられるであろうが、彼は二日目も同じ場所をねぐらとし、またしても暴行を受ける。彼には暴行を受けるだけの隠された理由がある。それは彼がこの世に生まれついたこと自体に不安を覚え、自分の存在が呪われていると感じとっていることである。そこには原罪にも等しい自分の存在を何とかして改かいしゆん悛したいと、心の奥底で願っているエストラゴンがいるのである。

自分の存在を悔い改めたい。しかし、エストラゴンが具体的にどんな悪徳を犯したというのであろうか。泥棒をしたのだろうか。それとも、殺人を犯したというのであろうか。彼は殺人などしてはいない。しかし、彼の回りを見渡してみれば、「死骸」があり、「死体の山<sup>24)</sup>」があると言う。この殺害は誰によって行われたのか。これはベケットの経歴から見ると、彼が外国人としてパリに住んでいたとき、ヒトラーに占領されるや、南仏への疎開を余儀なくされた第二次世界大戦の惨状を語っていることになる。エストラゴン自身が殺人を犯した訳ではないが、人類の悪がベケットの思念には焼き付いている。彼はこの残虐を問い、償わなければならない。ただし、作者のベケットはこの戦禍をあからさまに描こうとはしない。エストラゴンは自分の呪われた苦悩の原因を明白に知るよしもなく、彼は原罪のような漠然とした罪の意識を背負わされている。

夜一人になって堀の中に宿を取ろうとすると、見知らぬ暴漢に襲われる。これを知った仲間のウラジミールが救助の手を差し伸べようとする、彼は暴漢の多いことを理由にして断る。なぜエストラゴンは暴力を受けた場所に、二日目も寝泊まりしようとするのか。それは彼の罪の意識が無意識のうちにも、彼を断罪の場に立たせようとするからである。彼は罰を受ける必要がある。しかし、その罪は明白でなく、彼は夢の中でそれを受容する。夢の中の話を、彼は仲間のウラジミールに正しく告白することが出来ない。エストラゴンはそれを秘密にしようとして、堀のある場所を曖昧にしか答えられない。それはゴドーを待つことになるその場ではなく、どこか「別の所」であって、暴力の加えられる断罪の場なのである。ウラジミールとエストラゴンはゴドーを待っている。しかし、ゴドーは二人の前に出現することはない。なぜなら、エストラゴンにとってまだ彼の罪は、十分に悔い改められたとは言えないからである。彼はどこか知られざる別の地にあって、密かに彼の試練を受容する必要がある。

## 注

- 1) サミュエル・ベケット、『ゴドーを待ちながら』、Samuel Beckett, *En attendant Godot*, Les Éditions de Minuit, 1952, p. 10
- 2) 前掲書、p. 81
- 3) 前掲書、p. 74
- 4) 前掲書、p. 72
- 5) 前掲書、p. 75
- 6) 前掲書、p. 82
- 7) 前掲書、p. 87
- 8) 前掲書、p. 89
- 9) 前掲書、p. 10
- 10) 前掲書、p. 83
- 11) 前掲書、p. 71
- 12) 前掲書、p. 13
- 13) 前掲書、p. 103
- 14) マーティン・エスリン、『不条理の演劇』、Martin Esslin, *The Theatre of the Absurd*, Penguin Books, 1961, p. 56
- 15) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 92
- 16) 前掲書、p. 125
- 17) 前掲書、p. 98

- 18) 前掲書、p. 99
- 19) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, pp. 79–80
- 20) 前掲書、p. 78
- 21) ジル・ドゥルーズ、『消尽したもの』、Gilles Deleuze, *L'ÉPUISE*, Samuel Beckett, *Quad et autres pièces pour la télévision* suivi de *L'ÉPUISE* par Gilles Deleuze, Les Éditions de Minuit, 1992, pp. 100–101
- 22) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 115
- 23) 『ワット』、Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 209
- 24) 『ゴドーを待ちながら』、*En attendant Godot*, p. 90